

日記の虚実——鷗外・一葉文学の基底

木村 真佐幸

一 日記の真と偽

そもそも日記とは何か——。いま仮に、日本近代文学史上に多くの彩りと話題を提供しているものをあげても、その数は優に十指を超える。

例えば、鷗外の「独逸日記」を中心とするあの膨大な記録をはじめ、自己観照的懺悔録で、しかも若き日の魂の告白ともいえる国木田独歩の「欺かざるの記」、病の床にありながら超逸冷徹の視線で己れとその周辺を時にはユーモア巧みに描いた、いわゆる随想的性格の濃い子規の「仰臥漫録」、「病床六尺」、「墨汁一滴」。はたまた日記によって自己との対話を繰り返し、そこに自分の救いを求めた若い女性のロマンとも言える一葉の日記、そして石川啄木の「ローマ字日記」、「志賀直哉日記」、「永井荷風の「断腸亭日乗」、「小林多喜二日記」、さらには全八巻、各四百数十ページに及ぶ「高見順日記」、あるいは大岡昇平の「作家の日記」等々、文字通りそこには人間の「生きざま」が激しく波打ち、書き手の人生観、世界観が行間に溢れ、時には無韻の詩が奏でられて読む人の感動を誘い魅了させる。

ところで、これら多様でユニークな日記も、いささか乱暴な表現を恐れずに言うならば、おしなべて二つの類型に分けることが可能であろう。

まず、その一つは、いわゆるメモランダムとしての記録であり、かつ実用的意味の濃い備忘録である。いま一つは感想日記である。換言すると自己探索の記録であり、心情の起伏を時には自己凝視、内省をこめて刻む。やや過剰表現をすれば哲学的瞑想の断片の記録ということになろうか。

だが、ここに両者に共通する世界がある。それは、いずれも日記という、一見、事実の記録、内面心奥の秘やかな表現という印象とはうらはらに、実態はむしろ事実の取捨選択に基づく客観性の稀薄隠蔽、または言語表現の限界ならびに恣意的操作による事実の抽象化、拡散化——言ってみれば日記には必ずしもほんとうのことが書

かれるとは限らないということである。

二 鷗外の外形と内実

たとえば、先に記した森鷗外の「独逸日記」には、「舞姫」のヒロインの「エリス」はおろか、鷗外より一便遅れて来日した「ミス・エリーゼ・ヴィゲルト」の名前すら見当らない。特に後者は、東京、千駄木の鷗外旧居「観潮楼」跡にある鷗外記念図書館にふたりの「婚約」を暗示するモノグラムの展示があるし、その他にもこれを例証するいくつかの資料が発見されている。ましてや今日とは違って当時は四〇日余の船旅、船賃も七二〇円（現在に換算すると七〇八〇万円）——それなのになぜ記録がないのか。もっとも、これはもともと、漢文の日記を書き改めた時の削除？がやや定説になっている。もし、そうだとしても、ここにも書き手の選択が自然の姿を変えた確たる事例を垣間見る。

また、「独逸日記」ではないが、鷗外の長男、於菟氏が、父の日記は淡々として他人に対する批判がましいところは一言半句もない——といった意味のことを述べている。だが、よく読んでみると、抑制された筆致の中にかえって激しい感情の鼓動が伝ってくる箇所も少なくない。一例を示そう。

三 乃木夫妻の殉死と鷗外の苦悶

大正元年九月十三日、明治天皇の御大葬の夜、乃木希典夫妻が殉死した。鷗外にとって乃木は、年齢的にも社会的にも先輩であったが、鷗外がドイツ留学時に、来独中の乃木少将を表敬訪問して以来、公私にわたって肝胆相照らす仲と自負していた。ところで、乃木が殉死する数日前、今生の別離のあいさつに鷗外を訪問した。しかも「形見分け」よろしく乃木がジョージ五世の戴冠式に東伏見宮の随員として訪英した時の記念の品を持参して……。もちろん、これは結果として判断できる行為である。だが、鷗外はこの乃木の真意を忖度できなかった。否、できないことが自然というべきであろう。しかし、人間は、理屈でわかっているにもかかわらず自己嫌悪に陥入らざるを得ず、まさに身の置き処のない苦悶を結果することがある。まして、人間の生死にかかわることであつてみればなおさらであろう。鷗外は、この殉死事件、遺書問題の世論が、乃木の真意からおおよそ懸け離れたところで混乱している事実を憤懣やる方なき心情に駆られ、乃木の告別式当日、「殉死礼讃」ともとれる歴史小説第一作、「興津弥五右衛門の遺書」を中央公論へ送った。これはまさしく乃木への鎮魂の賦であり、弔辞的心情の書とも言えるものであった。

そこで、この辺の経過を示す一連の日記文を紹介しよう。

大正元年九月十三日（金）、晴。轎車に扈随して宮城より青山に至る。午後八時宮城を発し、十一時青山に至

る。翌日午前二時青山を出でて帰る。途上乃木希典夫妻の死を説くものあり。予半信半疑す。(傍線稿者)

十四日(土)、陰。乃木の邸を訪ふ。石黒男忠憲の要求により鶴田禎次郎、徳岡燕を乃木邸に遣る。
十五日(日)、雨。午後乃木の納棺式に蒞む。妻明舟町に往き夜半に帰る。(注、鷗外のしげ夫人の父が病氣になり、その看病の事実を指す。||木村)

十六日(月)、陰。軍医部長を第一衛戍病院に会して訓示する所あり。C. Cagawaと称するもの松本楽器店員の肩書ある名刺を通じて乃木希典の歌を求む。拒絶す。稻垣長次郎来訪す。(傍線稿者)

十七日(火)陰。矢嶋柳三郎を鶴田禎次郎の許に遣つて相談せしめ、岳父を再び赤十字社病院に入らしむることを決し、橋本監次郎を明舟町に遣る。荒木虎太郎、日野静、虫明盛光来訪す。

十八日(水)、半晴。Mc Neight、三浦守治・綾部勉来訪す。午後乃木大将希典の葬を送りて青山斎場に至る。興津弥五右衛門を舁して中央公論に寄す。(傍線稿者)

いささか引用の長きと、視点が周辺に拡散したことを省みなければならぬ。だが、われこそは乃木のよき理解者と自負していた鷗外が、結果として乃木が己れの理解の外にあったことへの持つて行き場のない苦懐軋転の心情を特に訴えたかつたからに他ならない。ここ二十余年來の乃木との交友關係、そして数日前の乃木来訪等々から御大葬の夜、乃木夫妻の死に「予半信半疑す……」は極めて当然であつたらう。しかも「殉死」という近代にあり得べからざる行為、さらに夫人までが……。大正期は東西両文明の融合、かつ、海外発展の時代、そしてこの両者のかけ橋の一翼を鷗外が背つていただけにこのショックは言語に絶するものがあつたはずだ。

しかも、世論は乃木の真意を歪曲し、御大葬の役不足に対する不満に発した自殺、はたまた、一時は発狂説が主流を占める状況さえ呈した。とにかく、世界各国の元首、大統領、報道陣が東京に集まる明治天皇の御大葬の時だけに事は深刻な事態であつた。この「殉死」の事実をどう説明するか——政府はもとより、軍部、新聞等關係者は困惑の極限にあつたことが当時の新聞各紙から想像するに吝かではない。

乃木は十二日夜、多くの關係者に遺言を認めている。世に言う「遺言条々」——静子夫人、湯地定基氏(夫人の兄)ほか親戚宛がすなわちそれである。十三日、午前八時に夫人は乃木と共に盛装して記念撮影をしている。そのテーブル、椅子は現在も乃木坂の旧乃木邸に保存されている。したがつて十二日の夜の時点では夫人は殉死の意思はなかつた。それだけに「出てましてかへります日になしときくけふのみゆきに逢ふそかなしき」という辞世の歌が悲痛感を誘う。一方、乃木は「神あかりあかりましぬる大君のみあととはるかにおろかみまつる」「うつし世を神さりました大君のみあととしたひて我はゆくなり」(傍線稿者)。「みあととしたひて……」から乃木の殉死の決意は明白だ。問題は、乃木の遺言公表がなぜ遅れたか……である。結局、九月十六日、午後四時、乃木邸の隣りの木戸邸で学習院主事、小笠原長生海軍大佐の手によって公表した。いや、せざるを得なくなつたというのが

真相であろう。なぜなら、国民新聞のすっぱ抜きをはじめ、九月十五日付の東京朝日でも、「遺書の一部開示——その内容は詳細に知るを得ざり」。あるいは、「乃木家の後あるを欲せず自己を以って終りとせん」といった乃木家廃絶問題がすでに取り沙汰されており、執拗に遺書の早期公開が求められている。結局、遺書は翌十七日の各紙に掲載された。

では、なぜ遺書の公表をためらったのか。

乃木の遺書は十数通に及んでいたようだが、その中、石黒忠恵や小笠原長生宛のものは比較的簡潔なもので、言うなればお詫びが中心である。だが、湯地定基、大館集作、玉木正之、そして静子夫人連名のもものは自明のことながら先に触れたように「遺言条々」と題して具体的である。関係部分を示すならば、まず第一条は、「自分此度、御跡を追ひ奉り自殺候段恐入り候儀其罪は不軽存候然る処明治十年之役に於て軍旗を失ひ其後死処得度心掛候も其の機を得ず皇恩の厚に浴し今日迄過分の御優遇を蒙り追々老衰最早御役に立候時無余日候折柄此度の御大変何共恐入候次第茲に覚悟相定候事に候」といった具合で、この度の自決は西南戦争軍旗喪失事件以来の既定の事実と読みとることができる。

繰り返すことになるが、とにかく遺言の字面からは殊さら公表を避ける箇所は見つけにくい。当局は、乃木殉死の意味づけに困惑の体であることは既に触れた。だが、殉死は歴然たる事実であり、新聞各紙は全面、はては付録まで擁しての乃木問題を彩る過熱ぶり。今さら、遺書問題にこだわることに納得がいかない。

だが、各紙を丹念に当たってみると、例えば九月十五日付の東京朝日などには、先に触れた乃木家断絶問題等が僅かなスペースながら掲載されているし、一方、大阪毎日の九月十七日付の紙面に、「遺言状の保留」とタイトルして、本日公表の遺言は「第二項に中断及び下略として省略されたる箇所あり……」ここでも「乃木家の廃絶問題」がその省略箇所ではないかと推理し、これらの処理をした寺内、長谷川両大将に「不審を懐き居れり」としている。また、東京朝日の九月二十日の紙面にも「遺書全部発表せよ」と表題して、乃木の遺書は十通あったと聞くが、その中、公表されたのは静子夫人、親戚宛と、その外、石黒忠恵、坂本中将、小笠原長生宛の四通のみで、他の遺書についても一日も早く公表をと迫っている。

もともと、遺言の数は定かではない。九月二十一日付の東京日日によると、「乃木大将の遺書又出づ」とあり、当該者は乃木の竹馬の友である桂弥一宛、内容は「養子厳禁の素志」が中心で、ここでも乃木家断絶の強い意志を想像するのに吝でない。また、九月二十日の東京朝日は、軍務局長田中義一少将宛の遺書問題に触れ、封書の表に「日本の軍務について」とあり、さらに「極秘」の添書の旨の当人談が記載されている。事の真偽は別として、とにかく相当数の遺書があったことだけは間違いない。

四 遺書公表逡巡と削除問題

ところで、先の遺書公表の逡巡問題と一部削除について視点をもどそう。

考えるに、当局が公表にこだわったのは、やはり「乃木家断絶問題」にあったのではなからうか——。確かに乃木は静子夫人、親戚宛の遺言第十条の末尾に、「伯爵乃木家は静子生存中は名儀可有之候得共呉々も断絶の目的を遂げ候儀大切なり……」と断言している。一方、当局の手による隠蔽、削除部分を調べてみると、一つは先に一部触れたが、華族継承は実子なら致方ないが、養子をとってまでは……とまさに「養子厳禁の素志」が強力であること、第二には、これの敷衍する問題として「祖先の墳墓の守護は血縁の有之限りは其者共の氣を付可申事に候乃ち新坂邸は其為め区又は市に寄附し、可然方法願度候」（傍点稿者）がその中心であったのではないか。因みに、この乃木邸は遺言に基づき東京都に寄付され、港区土木現業所が管理し、乃木夫妻の殉死の日、つまり九月十三日は一般に開放している。

では、なぜ、「養子問題」・「乃木断絶問題」を当局がこだわったのか——。

周知の通り、わが国における爵位制度は、明治二年六月、旧来の公卿・諸侯の称が廃止されると、これらの呼称として華族の語が使われていた。その後、明治十七年七月七日、華族令が制定され、該当者は皇族・旧公卿、旧諸公のほか、国家に勲功のあった人に授けられた。これらは、多分に「鹿鳴館時代」に象徴される欧化政策と軌を逸していることは自明のことである。

乃木も明治二十九年に戦功により功三級金鷄勲章と男爵を授けられ、四〇年には、やはり戦功により功一級かつ、伯爵へと累進している。ところで、乃木家が断絶になるとどうなるのか。華族制度は、世襲制度である。有爵者の男子は一定条件のもとに襲爵ができ、特権を伴う社会的身分が保証される。しかし、明治末から大正にかけての、いわゆる世に言う大正デモクラシーの世情の中で「爵位一代説」がささやかれていた。国家的勲功のあった当人はともかく、年金まで含めてこれが孫子の代まで世襲化され、社会的身分が保証されるのはいささか筋違い……といったものである。したがって乃木の遺書に盛られる一連の意思表示は、多分にこれら主張を是認し、この種の風潮に一そう拍車をかける起爆的要因になりはしないか。日露戦後の国家的変動が比較的少ない状況の中で、ようやく爵位を手にした連中からみれば、心中、いささか穏やかではなかったはずだ。乃木を例にしても肯けるように、日清日露の軍功が爵位授与の主要因となつてゐる。もちろん、これは乃木の意思とは無関係な制度的要因の結果であつたらう。一方、爵位継承のため、「養子縁組」は公然の事実であつただけに、これらについても同様であつたらう。したがって、然る可く筋からの圧力もその重大要因と考へても不思議ではない。

以上のように乃木殉死問題をめぐる世情は、鷗外の意志とはおよそ程遠いところで低徊していた。乃木の死か

ら告別式までの鷗外の日記でもわかるように、鷗外は公私にわたって繁瑣を極めた。衛戍病院での全国軍医部長会議、軍医総監として対応しなければならぬ。私的には岳父の病氣、入院の手配、しげ夫人が看病に当る必要にも迫られた。その間にも多くの来客。世情のかまびすしさを押しやって、乃木問題を心静かに考え、かつ整理するいとまがない。九月十六日、さしずめ、今日的週刊誌記者による乃木の歌の要請に拒絶——したのも鷗外はこの辺の心情をよく物語っている。しかも、日記はその場で即刻記すことはまず少ないはずだ。してみると、ここには時間的経過があってもなお、平静をとり戻し得ない感情の起伏が凝縮されていることになる。だが、ここで見落してはならぬことがある。「拒絶す……」は確かに厳しい。そして、この種の記載表現は鷗外の日記を整理しても極めて数少ない事例に属する。だが、多くの人はこれにとどまる事が可能だろうか。一般的には鬱積し抑圧された激情が日記というもう一人の自己の世界へ、時にはダイレクトに奔突するのがむしろ普通のことではなからうか。鷗外は「拒絶」の一語に収斂させた。ここにも「理知派」鷗外のトータルバランスを垣間見ると同時に、片や日記のもつ重層的性格を首肯させられる。

五 乃木殉死問題と歴史小説の背景

次いでにもう一つ、鷗外の心の波立ちと、人間鷗外の一側面を如実に示す苦患の一例をあげよう。

乃木の真意を理解されぬまま激しく揺れ動く世情の延長線上に、はたまた鷗外の胸裏に追い打ちをかけるような談話が新聞を浮き彫りにした。それは乃木遺言掲載と日と同じくした九月十七日の大阪毎日新聞に、京大教授文学博士谷本富（倫理学）の乃木罵倒論といっても過言でない、しかも六面全段を擁しての膨大にして、かつ痛烈な言辞の奔涛そのものである。詳細は拙著の鷗外論で触れているので重複を避けるが、その一部のみを紹介すると、まず、乃木は虫のすかない人であり、「露骨に言えば甚だ嫌いな人」からはじまって、東郷元帥との比較論、さらに常日ごろ「銜気な人」であり、「到底国家的政務の紛雜なることを理解し処理すべき人ではなく」、また、乃木を観相すると、「所謂孤相であり、平たくいへば下賤の相に近いもので到底大将といふが如き高職に上るべき富貴も天分もな」い。したがって旅順戦後「寧ろ仏門に帰依して菩提を弔ひ正覚を修むるを正当」である……といった厳しいものである。

ところで、先に触れた乃木への世評とこの谷本談は、乃木夫妻の告別式を明日に控えた鷗外の目にはどのような映じたであろうか。結局、乃木の遺言を下敷きにし、「此擬書は翁草に拠って作ったのであるが、其外は手近にある徳川実紀と野史を参考したに過ぎない」とあとがきにあるが、恐らく一晩で一気に書き上げたのが歴史小説第一作「興津弥五右衛門の遺書」である。九月十八日の鷗外の日記にあるように、「午後、乃木大将希典の葬を送りて青山斎場に至る。興津弥五右衛門を弔して中央公論に寄す」から、この執筆はまさしく鷗外の止むにや

まれる行為であり、畏友乃木に対する鎮魂の賦であり、かつ告別式の辞であつたのではないか——。したがつてここに人間鷗外の涙にくもつた素顔をみて逆に安堵もさせられるが、しかし、この作品に流れるある種の「殉死礼讃」をどのように解釈すべきであろうか。率直に述べると、乃木への心情傾斜の結果は諒とするとしても、大正期の中心人物、森鷗外の手になる「殉死礼讃」とも読みとれるこの作品を鷗外が冷静さをとり戻した時点で、恐らく鬼の霍乱にも心境で苦慮したに相違ない。

既に本稿の趣旨から相当逸脱しているので、爾後の経緯についてやや箇条書的に述べると、乃木告別式後、というより御大葬後の沈静化を待っていたかの如く世情は乃木問題について複雑に蛇行しはじめた。「偽乃木の続出一、殉死流行の兆？」（東京朝日、九月十八日）「乃木將軍夫妻の新墓詣、五、六万の人数」（東京朝日、九月二十日）、「乃木大將墓参の小学生―其数無慮三千余人」（東京日日、九月二十六日）を筆頭に、多様な形で紙面を波打たせている。

しかし、さらに鷗外の視線を釘づけにしたのは海外の論評ではなかつたか。世界各国の乃木殉死評が大阪毎日、東京朝日を中心に展開された。その中で、特に「乃木大將の死に依り、黄白両人種の融和は、永劫出来ない相談であるといふことを悟つた」から、果ては「氣味悪き力とは何ぞ武士道是れ……」。そしてかかる思想は「適者生存する進化の理を逆行して終に日本を貧弱ならしむる結果を来さん……」等々である。

ところで、この海外の論評はこれまた、鷗外はどのように受けとめたであろうか——。初稿「興津」執筆時は、国内外の非難に義憤を感じ、衝動にも似た形で一氣呵成に書き上げたが、いま一応冷静な視座に立つてこれらの論評をみる時、若くしてドイツに留学し、科学者としてはもちろん、文学者として、思想家として近代ヨーロッパの風土にふれた鷗外にとって、「欧州文明の吸収と同時に古き国民思想の保存云々」は、実は牽強附会ながら「興津」執筆者森鷗外の上にそのまま照射されるものではなかつたか——。もし、その事が不幸にして正鵠を得るものであるとするならば、武士道の典型を説き、「主君の命は絶対」という初稿「興津」の作者はどのように評価されるのであろうか。時は明治に非ずして、大正の新時代なのである。しかも、「新時代への動き」は世論形成と共に着実に台動し始めていたのである。

鷗外はその後、大正元年十一月二十九日、「阿部一族」を脱稿し、ここで武士の「意地」をテーマにしながらも、第二主題で「殉死エゴイズム」を設定し、さらに大正二年四月、初稿「興津」を九〇%改作して「殉死礼讃」をもの見事に払拭した。のみならず、「阿部一族」「興津弥五右衛門の遺書」「佐橋甚五郎」と三作を一括し「興津」を中に挟む形で構成し、これを「意地」と表題して靑山書店から刊行した。しかも、この序文が看過できない意味をもつ。その一部のみあげると、『意地』は最も新しき意味に於ける歴史小説なり。従来の意味に於ける

歴史小説の行き方を全然破壊して、別に史実の新らしき取扱ひ方を創定したる最初の作なり。其の觀察の点に於て、其時代の背景を描くの点に於て、殊に其の人格描写の点に於て、読者は必ず此の作に或る驚くべき新意を見出さん……」(傍点稿者)

この過剰なまでの主張をどうとるべきであろうか——。私見を端的に述べると、これは初稿「興津」の「殉死礼讃」払拭であり、換言すると「脱乃木」的意図そのものではなかったか。

高橋義孝氏は、鷗外と漱石の日記を比較分析して、「漱石の日記の断片性、感想めいたものや、いわゆる日記的なもの、覚書など雑然とより集まった『日記』の不連続性、そこにはいかにも人間的にしたしめる何ものかがある。これに反して鷗外の日記にみられる厳密な数学的形式、連続性、客観性、簡潔などには、人間らしさという言葉では到底表現しがたいものである」(『森鷗外』)と述べている。比較論としては間然するところは全くない。ただ、自己の内面と厳しく対峙する鷗外にとってもなお、先の「拒絶す……」に象徴されるように、鷗外も人の子——時には字面はもとより、行間にも無韻の詩が奏でられてふと微笑を誘う箇所もある。人間は所詮人間であつて完璧はあり得ない。そこに人間の魅力と親しみがある。歴史小説第一作の初稿「興津」から改稿「興津」への経緯を、本来の文学論や文学史的視点からではなく、人間鷗外に絞つて触れた。つまり、人間森林太郎の魅力を探るために——。

六 日記に見られる無意識の意識

ところで、これは鷗外に限つたことではないが、当然、記録されてよいはずの「事件」や、少なくとも本人にまつわるシヨッキングな問題が意外に記されていないことが多い。これはなぜか。

いろいろの理由が潜んでいて一概には決め難いが、まず言えることは「ひと」に見られるという無意識の意識が働くことだ。もちろん、この場合のひとつとは必ずしも他人の謂ではない。むしろこれを確実に見る人間——それは書き手自身である。しかも、忌避したい衝動に駆られる「事件」であつても、時間的経過の後、これを再現し、かつ文字によつて客体化する。これではたまたまものではなない。したがつて日記は、書くべき内容の取捨選択が行われるのが自然の理ということになる。

後に触れるが、この最たるものは一葉の日記であろう。一葉は、長兄泉太郎の結核による死の軌跡をわが身に重ねて愕然となつた。己れに迫る「死の影」を意識し、断崖絶壁に立たされた一葉が、渾身の力をふり絞り、創作活動によつて己れの足跡を確実なものにするための経済援助を期待し、観相家久佐賀義孝に賭けるべく煩悶し逡巡の日々を重ねた。時に明治二十七年二月のことである。つまり、二月の三日から二十一日までの日記がほとんど空白である。そして二十二日、たった一言「かみあらひ」のみ。だが、この一句は何万語にも増して重く、

一葉の苦悶の経緯が水面下に揺曳して読者の胸を打つ。そして翌二十三日、「秋月」と偽名して久佐賀訪問後の約四〇〇〇字に及ぶ日記がこれをよく説明している。一葉は、日記を書きたくとも書けなかった。書けば己れの弱さ、みじめさを投影し、いやが上にもこれを客観視することになる。かくして、二十二日の「かみあらひ」一言こそ、沐浴齋戒し、懐剣を擁して单身敵地に乗り込むといったその決意表明にも似た心境のあらわれであり、二十三日の四〇〇〇字は、鬱積しつづけた心の屈折が一気に奔騰した結果以外の何ものでもない。

以上の一例でも肯げるように、日記の空白期間こそ、時には書き手の懊悩や重大軌跡を内包していることが少なくない。

七 一葉の日記——多層的テキストと自己形象化

桑原武夫氏が、明治時代の青春の実体を語る三大日記として独歩の「欺かざるの記」、「一葉の日記」、そして啄木の「ローマ字日記」をあげている。そこで次に、既に一部触れたが、一葉における日記の意味を考えてみたい。周知の通り、一葉の日記は現存するものの中で最も早い時期の執筆としては明治二十年一月、一葉、十六歳、つまり「身のふる花まきいち」がある。以来、死の数か月前まで書かれた四十四巻、この質量ともに重厚で時には華麗な日記は、精神的孤児とも言える一葉が、人の世の表裏、世情の渦の中で翻弄され、もみくちゃにされつつ時には悲憤慷慨を、時には過度の虚勢さえも余儀なくされる生きざまの証明であり、心の句読点でもあったはずである。そのような意味から、一葉の日記は孤独な若い女性のロマンであり、私小説ですらある。したがってその内容は言うに及ばず、各巻の表題もその時々々の生活構造、感情の起伏、はたまた苦悶の足跡が如実に記されて読む者を惹きつける。ここに一葉日記の意味がある。

一葉の日記の魅力は、やはり小説家志向を固めた明治二十四年、一葉、二十歳以降であろう。それは「萩の舎」の姉弟子であった田辺花圃が逍遙の推薦により、「都の花」に「藪の鶯」という小説を書いて三十三円二十銭という多額の原稿料を得、経済観念の乏しい父太一を助けて兄の一周忌の法要を見事に果たし得た美談に刺激され、己れもこれを志し、その習作としての日記を意図したところにある。

一葉は「萩の舎」の歌子の前では歌人志向を堅持し、片や内心では小説をもって生活窮乏打開の方途を決め、女流女作実現という、当時では想像もつかない大それたことを夢想した。一葉の日記に「われもはたちになりしかば……」の一節がある。これを今日的成人式の謂にとる研究者もないわけではない。だが、それは先に述べた先輩、花圃が二十歳の時に小説で快挙をなし得た——その年齢条件への到達から、小説家として自立しようという一つの決意表明ととるのが自然である。花圃、一葉、伊東夏子と「萩の舎」の三才媛といわれていただけに、花圃に出来たことが自分に出来ないはずがない、あとは年齢条件の一致のみと考えて射程距離を設定したものと

考えられる。

以上のことから一葉にとって日記とは、つまり小説のための習作——とすれば、日記が虚構的意識や要因を含むのは当然の帰結となる。

八 実感の落差——桃水への愛憎

人は往々にして衝動的行為に走ることがある。そこには論理も知性も無力である。だが、生活はリアリティが伴う。ここに衝動的行為と生活的現実とのはざまにあつて自己嫌悪に嘖まれる。そして、結果論としてやむなしと正当化してみても、所詮、虚しさは消し難い。

一葉は、明治二十六年七月二十日、本郷菊坂から下谷竜泉寺町三六八番地、通称「大音寺前」へ転居し、ここで荒物屋兼駄菓子屋を営んだ。これは生活の活路を「商売」という一つの「転身」であつた。一葉の両親は、「俄士族」よろしく、士族の株を買収し、偽の家系図を作成してまでの「旗本直参」であつただけに、僅か半年間の奉行所同心とはいえ、この武家政治崩壊はまさに樞花一朝の夢となつた。この武士への野望は粒粒辛苦の結果、ようやく獲得したものであつただけに、士族意識は他と比較し難いほどの執着であつたことは当然である。

商売による転身——一葉一家、特に母はこのことを零落意識として悲嘆にくれ一葉をせめた。根底には士農工商意識の存在が強力で、かつ旗本直参の「亡霊」が一葉の行手を絶えず遮つた。それにもかかわらず、商売はもちろんのこと、さらに、なぜ、遊郭街に足を向けたのか。一葉は転居の前日の日記に、「今宵は何かむねさわぎで睡りがたし。さるは新生涯をむかへて旧生涯をすてんことよこたわりて也」と記し、翌二十日の転居第一夜は、「唯かく落はふれ、行つての末にうかぶ瀬なくして朽も終らば、つひのよに斯の君に面を会はする時もなく、忘られて、忘れはて、我が恋は行雲のうはの空に消ゆべし……」と嘆き、さらに「終いに此よを清く送り難く、にごりににごりぬる浅ましのおもひ落され、更にかへりみられるべきにあらず……」とふたたびこの夜も一睡もできなかったことが書き綴られている。

一葉は、別に遊女になつたわけでもない。だが、この日から日記の表題を「塵之中」と自己卑下した。これは何を意味するのか——。これは言うまでもなく、小説の師であり、恋の対象と一葉が意識していた半井桃水への思慕の情と、一言のあいさつもせずに衝動的に転居した悔恨以外の何ものでもなく、「遊郭街」——つまり、一葉がここに足を向けた段階ですでに「精神的娼婦」意識が働いていたことの裏付けとみる。一葉は桃水の家に下宿していた桃水の妹と女学校の同級生、鶴田たみ子の妊娠の相手を桃水と勝手に思い込んでしまった。事実には桃水の弟、浩である。

恋愛は二人の閉鎖的世界から出発する。そして同時に、能動性と受動性という相反する意識の許に、ゴールが

不透明なのが恋の宿命でもある。したがって、内向の度は漸次高まり、事と次第によっては愛も憎しみに変容する。一葉も例外ではなかった。一葉の遊郭街転居は、言ってみれば桃水へのあてつけであり、反抗であり、自己流謫的な心の家出である。一葉は、度々述べたように、家族の中にあっても精神的孤児であっただけに、事の真偽を確める端緒も余裕もなかったのが現実であった。

だが、この「大音寺前」で商売を通し、赤裸々で生の人間に接触した一葉は、自らも袴を脱ぎ、時には開きなおりの感さえ吝めない。例えば、従来はその片鱗さえ見られなかった「凄み」のような積極的姿勢が日記の各所に散見する。開店資金の協力を遠戚筋の西村釧之助へ求めたが不首尾であった。転居後の五日後、すなわち七月二十五日の日記に、「……彼ほどの家に五円、十円の金なき筈はあらず。よし家にあらずとて、友あり、知人もあり、男の身のなさんとならば成らぬべきかは。殊に、母君のかしら下ぐる斗にの給たけるをや。とぎまかうざまに思へど、かれは正しく我れに仇せんとならばあくまでせよ。樋口の家二人残りける娘のあはれ骨なしか、はらはたなしか、何ぞや釧之助風情が前にかしら下ぐべきかは……」と西村への悪態雑言。しかも借金の返済を迫つての言辞ではない。開店の融資——つまり金を借りに来たのだ。このような金借りが来たのではたまつたものではない。だが、皮肉なことにはこの行動曲線が市井的写実主義作家樋口一葉誕生の遠因を醸成したことになる。

九 借金哲学——虚構意識と自己正当化

一葉は、きまつて七円か十五円を借金した。七円は一月の生活費であり、十五円はふた月分である。縫物、洗濯では生活費のいかほどでもない。当時、浴衣一枚の洗濯代が一銭(今日の一〇〇円くらい)、縫物は単衣で七〜八銭、冬物(綿入れ)で十四〜五銭、結局、原稿収入の見通しが確立しないまま借金によって生活を余儀なくした。しかも、日記の各所に、「わがこゝろざしは国家の大本にあり。わがかばねは野外にすてられて、やせ犬のゑじきにならんを期す」(明治27・3・10)とか、「我れは人の世に痛苦と失望とをなぐさめんために、うまれ来る詩の神の子なり。をくれるものをおさへ、なやめるものをすくうべきかは、わがつとめなり」といった具合に、文筆をもつての世直しの気負いが各所に伺われる。時に日清戦争その前夜、風雲急を告げる緊迫した世情とはいえ、借金は、所詮借金に他ならない。借り入れた金は単に生活の方途のためならず。天下国家のため……と力説したところで、一葉の「借金哲学」は余りにも客観性に乏しく、自分勝手な恣意的気概に過ぎない。

だが、この「気負い」こそが一葉の精神的支柱であり、また日記がこれを救済してくれたのも事実である。

一〇 死の影——奇蹟の十四か月と久佐賀問題

一葉の長兄泉太郎は、明治法律学校(現・明大法学部)から大蔵省に入り、間もなく結核を患い二十四歳で夭

逝した。泉太郎と住居を共にする一葉は絶えずこの死の影に脅かされていた。そして、それに追い打ちをかけ、決定打ともなったのが従兄幸作の死である。

明治二十七年七月一日、「十時頃成けん、桜木町より使来り、幸作死去の報あり、母君驚愕、直に参らる。からはその日寺に送りて、日ぐらしの烟とたちのぼらせぬ。浅ましき終を、ちかき人にみる。我身の宿世もそゝろにかなし」(傍点稿者)。一葉のこの悲痛な慟哭は従兄の死の痛恨も自明のことながら、同時に己れの運命の極った苛酷なりアリズムの暗示におののく姿ではなかったか。

なぜなら、明治十年十月四日付の「太政官命達第二十五号」(墓地及埋葬取締規則)第三条によれば、「死体ハ死後二十四時間ヲ経過スルニ非サレバ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス。但別段ノ規則アルモノハ此ノ限ニ在ラス」とある。(傍点稿者)つまり、幸作は「別段ノ規則」に該当するいわゆる伝染病の類であることは明白である。

翌七月二日、「早朝、母君およびおくら(幸作の妹)木村注)と共に、日ぐらしに骨ひろひに行く。山川程を隔てたる叔甥(幸作は山梨県にいたが、病気のため東京上野の丸茂病院に入院していた。木村注)のおなじ所の烟とのぼるは、こも、のがれぬ宿縁なるべきにや……」と一葉は、前日と同様、再び死の影の迫りつつあることをいやが上にも容認せざるを得なかった。

長兄の死に加え、山梨県にいた従兄までもが同じ病気で——この黒い運命を自覚した一葉は、背水の陣を敷く思いで経済援助者の探索に当り、先に一部触れた観相家久佐賀義孝訪問となる。久佐賀は、一葉に「体」交換条件でスポンサー受諾をにおわし、一時は一葉の憤怒をかうが、しかし、一葉は、二十七年十二月には千円(今日の約一〇〇〇万)の借金を久佐賀に申し込むといった危険な綱渡りをやってのけた。この千円の申し込み——つまり、「百円でないところに一葉の意地とプライドがある」(五十嵐勝弥「いのち」の文学——生いたちにもみる一葉文学の光と影)札幌大学教養ゼミナル論集、平2・3)。そして、時には、見も知らぬ作家や宗教家にまで借金の要請へと必死であった。一葉に迫った「死」——これがこのような行為の「原動力」であったことに読者の涙を誘う。

一葉の「晩年」を形容するのに「奇蹟十四か月」ということばがある。それは明治二十七年十二月から二十九年の一月の期間を指す。一葉はこの期間に詩的抒情性豊かな「たけくらべ」を書きながら、片や「大つごもり」「にぎりえ」「十三夜」「わかれ道」「裏紫」等々、性と遺伝、家と肉親のしがらみ、そして人間的自我を追求する数々の名作、問題作を堰を切ったように書きまくり、遂に力尽きた。まさに奇蹟的である。

一葉における日記の意味——それは己れと対話しつづける心許せる唯一の友、すなわち日記こそ一葉の無意識の底に沈む心の支えそのものであったといえよう。この「日記」を無視して一葉文学は語れない。